

令和4年度版

愛えがお顔



感動ものがたり

「感動のエピソード」
& 「愛顔の写真」

愛媛県



銀行を、 人に合うかたちへ 変えていく。

お金に向き合うことは、お金の先にいる人に向き合うこと。

だからこそ私たちは、デジタルを取り入れ変革を進めています。

心地よく、使いやすい、人にとってより自然な存在になれるように。

どこからでも、つながる。手のひらで、お手続きできる。

将来の計画を、プロとつくれる。悩みを、もっと分かち合える。

いま、着実にそれらを実現しています。

私たちはきっと、ずっと、こんな銀行になりたかった。

Better Money.
Better Life.



伊予銀行

広告

世界一強い
ボクサーになる



世界一になる!



将棋の魅力を
沢山の人に
広めたい!!



観客に
感動を与えられる
踊り手に



日本代表に
選ばれる!!



ひめぎんは、
ゆめぎん。

みんなの夢を応援します。

 **愛媛銀行**

愛顔^{えがお}とは？

人と人との助け合い、

支え合いの根底にある「愛」と、

困難にくじけることなく挑戦し、

道が開けた時にこぼれる「笑顔」が

結ばれて生まれた言葉。

愛媛県は、

「愛顔^{えがお}あふれる愛媛県」を

目指しています。



知事あいさつ

愛媛県知事 中村 時広

本事業は、愛媛県が提唱する「愛顔^{えがお}」を全国に広く発信し、本県の知名度向上と愛媛ファンの獲得につなげるとともに、「愛顔あふれる愛媛県」の実現に向けた機運醸成を図るために実施しているもので、今回で9回目を迎えます。今年度は、エピソード部門に、47都道府県と2か国から4,158作品、写真部門には、45都道府県から6,012作品の応募をいただきました。厚くお礼申し上げます。

受賞作品の選考に当たっては、審査委員長である俳優の伊ッセー尾形さん、俳人の神野紗希さん、そして私が最終審査を行ったほか、写真部門については、愛媛県美術会の方々にも御協力をいただきました。

知事賞をはじめとする各賞に選ばれました皆さん、誠におめでとございます。拝見した作品は、どれも「愛顔」と「感動」が詰まった力作ぞろいで、毎年のことですが、

選考には大変苦勞いたしました。中でも、エピソード部門で知事賞に輝いた二つの作品は、脳梗塞の後遺症で不自由な身体ながらも前向きに生きた夫とその妻の思い出、溶接をする母に憧れ造船業を志す娘の決意と母への感謝の思いがえがかれた心温まるものがたりで、胸を打たれました。

今年度の受賞作品をまとめた本作品集を多くの方々に御覧いただくことで、たくさん「愛顔」が生まれ、その輪が全国に大きく広がることを切に願っております。

終わりに、応募いただきました方々をはじめ、本事業に御協力を賜りました関係者の皆様に深く感謝を申し上げます。

目次

「エピソード部門」(一般の部)

「知事賞」	秘密の話	野中	紀子	(愛媛県)	8
「特別賞」	空気に溺れる	丸林	しょうこ	(沖縄県)	10
「優秀賞」	雨の日の焼きめし	松田	良弘	(大阪府)	12
	佑司が笑った	阿部	廣海	(静岡県)	14
	見つけたよ	伊藤	美智子	(宮城県)	16
「入選」	亡くなった夫からの贈り物	西川	まりえ	(和歌山県)	18
	中国語の『授業』	大西	悠貴	(兵庫県)	20
	お父さん おかえり？	尾木	直子	(滋賀県)	22
	愛顔の通勤風景	荒木	孝宣	(愛媛県)	24
	借り	松本	智子	(北海道)	26
	母が笑った	加藤	正雄	(愛知県)	28
「佳作」	変顔	大石	さち子	(神奈川県)	29
	マーガレットとピンクのバラ	松本	由佳	(愛媛県)	30
	キャンサーギフト	井垣	厚子	(大阪府)	31
	今でも生き続ける祖父の笑顔	紅谷	希望	(山形県)	32
	父の免許証入れ	篠原	恵	(北海道)	33
	アン・デイ・フロイデ	木村	敬子	(滋賀県)	34
	のっぼさんのメッセージ	森田	剛	(広島県)	35
	駆け抜ける、スーパーマザー	塩田	きよら	(東京都)	36
	ゆうしゃのしるし	佐藤	栄児	(東京都)	37

「エピソード部門」(高校生以下の部)

「知事賞」

憧れの存在

「特別賞」

愛顔の波紋

「優秀賞」

妹の思いやり

願いの横断幕

母の分身

「入選」

祖母と足踏みミシンと…。

私の友達

すごいね、まなちゃん

輝き

約束券

村井

珠夏(愛媛県)

高校生

：

40

岡田

若子(愛媛県)

高校生

：

42

渡邊

滯羽(愛媛県)

高校生

：

44

土井

倫太郎(愛媛県)

中学生

：

45

宮本

弥怜(愛媛県)

高校生

：

46

岡中

由依(愛媛県)

高校生

：

47

渡部

日陽(愛媛県)

高校生

：

48

大野

愛未(愛媛県)

高校生

：

49

坂本

瀬菜(愛媛県)

高校生

：

50

向井

絢菜(愛媛県)

高校生

：

51

「写真部門」

『一般の部』

「知事賞」

また乗せてね♪

「特別賞」

愛顔で味バトン

「河原学園賞」

元気に大きく育ってね！

「優秀賞」

あれ、パパかな!?

息子が重い！

幸せのまんなかの涙

棚田で一休み、岩井さんご夫婦

それぞれの笑顔

ファッションショー

出来てうれしい走り縄跳び

だいこんとつたど〜！

橋本

圭右(愛媛県)

高校生

：

54

忽那

博史(埼玉県)

高校生

：

54

松岡

杏奈(東京都)

高校生

：

54

西田

奈緒美(愛媛県)

高校生

：

55

門林

泰志郎(福島県)

高校生

：

55

天野

真里(静岡県)

高校生

：

55

原田

洋子(愛知県)

高校生

：

56

宮谷

伸司(愛媛県)

高校生

：

56

岸田

宜征(愛媛県)

高校生

：

57

原田

廉士(神奈川県)

高校生

：

57

天野

雅郎(愛知県)

高校生

：

57

『小・中・高校生の部』（小学生未満含む）

「知事賞」 団子親子 杉山 湊音（愛知県）
 「特別賞」 いつまでも、このままで 中野 龍（愛知県）
 「河原学園賞」 笑顔満開 佐々木 結衣（東京都）

『一般の部』

「愛媛広告協会賞」 ひ孫とおばあちゃん 神戸 晴香（愛知県）
 「愛媛県商工会議所連合会賞」 孫と初めての散策 原田 史生（愛知県）

『小・中・高校生の部』（小学生未満含む）

「愛媛県IT推進協会賞」 母の笑み 神樂所 真琴（大阪府）
 「愛媛経済同友会賞」 暖かい愛顔 今泉 日和（愛知県）
 「愛媛県歯科医師会賞」 ゆらりゆらり 秋山 楓（大阪府）
 「愛媛県獣医師会賞」 いつまでもその笑顔で 石井 彩乃（神奈川県）
 「愛媛県情報サービス産業協議会賞」 「つりかん」大好き 杉野 凜（愛媛県）
 「愛媛県理容生活衛生同業組合賞」 跳ねる 吉田 聖（北海道）

「エピソード部門」一般の部

秘密の話

野中 紀子（愛媛県）

五年半前に脳梗塞を発症した夫には左半身片側麻痺という後遺症のほかに「高次脳機能障害」という難しい病名がついた。脳の神経がうまく働かないので理性のコントロールが苦手となりよく泣くしよく怒るようになった。それでも記憶の回路は鮮明で、楽しかったこと、嬉しかったこと、がんばったことなど思い出話に花を咲かせては不自由な身体ではあるが明るく前向きに生活していた。

ある時、今は亡き長兄が元気で帰省しているかのように語り、妻である私に自分の代わりに会いに行ってくれと頼む。しばらく兄の話が続いたかと思ったら、今度は年老いた両親がふたりで暮らしているので、お母さんの好きなスイカを買って届けてほしいと言う。夫の妄想に話を合わせては、兄のこと、両親のことをあたかも実在しているかのように話して夫を安堵させた。しかし夫の妄想はこれだけでは収まらなかった。

ある日夫が「おもしろい夢を見たぞ〜」「どんな夢？」夫はニヤニヤしながら「君に子どもが出来たんじゃ」「え〜！こんな七十過ぎたおばあちゃんに子どもが〜？」内心驚きを隠せなかったが、その日を境に夫はことあるたびに「子どもは元気か？」「腹を冷やしたらいかんぞ」「走るな！転んだらどうするんぞ！」その様子はもはや夢の中の話ではない。現実起こった嬉しい体験そのものに化けた。

「名前は桃子にするけんの！」夫の妄想はひとつひとつが現実味を帯びてくる。「命名札を用意しといてくれ。元気になったら自分が筆で書くけん」「赤飯を配る先をリストアップしとけよ」いつまでたっても膨らまない私のお腹をそつと撫でてみる夫。「動きよるか？」「あっ！今動いたよ！」夫は何とも言えない嬉しそうな笑顔を見せた。約六カ月夫は新しい命の誕生を待ちわびながら、七十八歳の誕生日前夜に静かに息を引き取った。夢と現実のはざままで確かに夫は最高の愛顔を残して永遠の旅路へひとり旅立った。

「特別賞」

空気に溺れる

丸林 しょうこ（沖縄県）

「ご飯食べた？」「着替えてー」「急いでー」。朝はいつもドタバタだ。7時半に家を出て、4歳の娘を保育園へ送り、大急ぎでフルタイムの仕事に向かう。

ある朝、その日常に異変が起こった。

「ご飯食べた？」「着替えてー」「急いでー」。いつも通り声をかける私の目からは涙がこぼれていた。わずかに驚いた表情を見せた娘が「ママどうしたの？」と訊く。誤魔化すためハグをしようとする私の手を、娘はサッと振り払い、私の目を真っ直ぐ見て、「ママ、なみだはね、おこってるか、かなしいか、こまってるかのどれかなんだよ」と言い、ピンとたたてた小さな3本の指を私の顔の前に出して「ママはどれ？」と訊いてきた。

私はハッとした。

長引くコロナで、ピンと張りつめた会社の空気、保育園の登園自粛の空気、気分転換だった同僚とのランチは黙食。さらに、私のコロナの罹患により、復職後、廊下ですれ違いざまに話すことさえ憚られる空気。

私は、社会の空気に呑み込まれ、息ができなくなり、溺れそうで「困って」いたのだ。

おそらく保育園の先生が教えてくれたであろうこのシンプルな涙の理由に、私は肺に一気に空気が入り込むような感覚に見舞われた。

「お母さん、困っているみたい。」そう言うと「ママはこまっついてないでるんだね。」と娘。理由を知り満足した娘は、クルッと私に背を向け、鼻歌混じりに保育園の支度を再開した。私はその後ろ姿を見ながら、薄暗い曇り空のような視野が明るくひらけるのを感じた。

会社には休職を願い出た。

今、私は夏の強い日差しの中にいる。無邪気にはしゃぐ娘とひとときの休息の日々を過ごしている。先はまだ見えていない。でも大丈夫。キラキラと眩しい水平線、青く高い空、娘の屈託のない笑顔を見て、私は心からの愛顔でいられているのだ。

私は呼吸できている。

雨の日の焼きめし

松田 良弘（大阪府）

幼い頃、私は雨が大好きだった。毎日雨が降ればいいと思っていた。瓦葺き職人だった父の休みは、雨の日だった。晴れの日も朝早くに家を出て、暗くなるまで帰って来ない。そんな父と一緒に居られるのが、雨の日なのだ。

学校から帰った私は、お気に入りのカッパを着て父と散歩に出かけた。仕事の仕上がりを確認する父について行くのだ。歌を歌いながら父の横にくっついて歩く私に、父はいつも優しい笑顔で答えてくれた。父が葺いた屋根瓦が、雨で深く黒く光る景色はとても神秘的で、今でも鮮明に覚えている。それを見上げている満足そうな父の横顔も、忘れはしない。父は雨から町の人々を守っていたのだ。

散歩から帰ると、父は決まって台所に立った。パートに出ている母の代わりに、夕食を作るのだ。父の料理は豪快の一言。材料は冷蔵庫の残

りもの。それらをとにかく炒める。どんな料理でも味付けは同じ。塩こしょうと醤油、生姜にニンニク、ごま油。そして最後に全部を卵で絡める。こうして完成した今日のメニューは、父特製の『焼きめし』だ。

父は中学を卒業するとすぐに職人の道に進んだ。青春を横目に、汗と泥の海の中を必死に泳ぎ続けた。そして、親方や先輩の為に食事も作つた。肉体労働にはスタミナとボリウムが重要。毎日大盛の食事で心と体を鍛え上げた。父の料理は、^〴頑張り^〵の味なのだ。

「みんなのように、一緒に野球も出来ないし、遊園地にも行けなくてごめんな・・・」

焼きめしをあてにビールを飲んでいる父が、ポツリと言った。私は首を振った。

「父さんの料理、僕大好きなんだ」

雨に濡れた瓦のように、父の焼きめしはキラキラと輝いていた。それは、私達家族を支えてくれている大切な味なのだ。私は焼きめしを、口いっぱい頬張った。

ビールのせいかわからないが、目を赤くした父も、笑いながら焼きめしをかきこんだ。

「優秀賞」

佑司が笑った

阿部 廣海（静岡県）

佑司は中学三年生になったが、ずっと不登校でもう一年半も経つ。私も妻も、これから高校進学を控え、どうしたらよいものかと悩んでいた。ある日、担任の先生から電話が入った。

「〇月〇日、学校寄席があるので聞きに来ないか。」という連絡だった。佑司は迷っていたようだが、大好きな落語を聞きたいと、その日は自転車で登校して行った。

十時頃、佑司君が来ていないと学校から連絡があった。どうしたのだろう。気が変わってどこかへ行ってしまったのか。心配は募ったがとにかく家で待つことにした。

昼近くになって佑司が泥だらけの自転車を引いて帰って来た。制服も靴も鞆もびしょ濡れだった。佑司は無言で浴室に飛び込んで行った。

何があったのか、聞いても彼は口を開かないことが分かっていたので

無理に追求することはしなかった。

数日後、校長先生から電話がかかってきた。警察から連絡があり、佑司が人命救助で善行賞を授与される、とのこと。朝、登校途中、田んぼの水路に落ちたおばあちゃんを助け、介抱して救急車を呼んで病院に連れていったという。学校に行かなかった理由がやっとわかった。

授賞式に親子で出席した。地元の新聞にも大きく掲載され、地域の人からも祝福を受けた。心を閉ざし暗かった佑司に笑顔が戻った。暗い出来事ばかり続いていた我が家にやっと明るいニュースが届いた。久しぶりに家族の会話も弾んだ。

「佑司おめでとう。えらかったな。」

私は彼の肩を強く抱いてやった。人のために役に立てた喜びに佑司の心は徐々にほぐれていった。

「前を向いて生きてゆけよ。」

私は心の中で佑司にメールを送った。

「優秀賞」

見つけたよ

伊藤 美智子（宮城県）

私の住む宮城から愛媛へ直行便の運行が決まった日、就航初日の便を迷わず予約した。

愛媛はずっと行きたかったところ。

どうしても行かねばならない場所だった。

数ヶ月前、何気無しにネットを覗いていた時、私ははっと息を飲んだ。

『息子がいる』

そこには8年前に白血病で急逝した息子にそっくりな笑顔のお地藏さんがいた。

いつ誰が投稿したのかもわからない、かなり昔の写真。小さく書かれたお寺の名前を頼りに検索してもなかなか情報が掴めない。

もう行くしかない。

誰もが悪い冗談だと思った。

身長百八センチ、体重百キロ。大学では応援団に入っていた底抜けに明るい息子。

彼が突然の病で二十一才の若さであっけなく死んでしまった。それを頭ではわかっていても未だに信じられずにいる。無意識に人混みの中で似た人を探していたり、知らない街でひっそり暮らしてしまいかと本気で思ったり。

そんな時に見つけたお地蔵さんだった。

松山空港は大雨。

レンタカーで山あいの交互通行もできない狭い道をナビを頼りに飛ばした。

古いお寺。庫裡には人の気配もない。

『いた』

石段の上に息子が立っていた。

小さなお地蔵さんは息子が病魔から解放され百八十日ぶりに家に帰ってきた時とそっくりな穏やかで優しい顔をしていた。

『やっと見つけたよ』

傘をさしかけて、何度も何度も頭を手を足を撫でた。

心の荷がほんの少し軽くなった気がした。

そうか、息子は愛媛にいたのか。

また息子の愛顔に会いに来ようと思った。

「入選」

亡くなった夫からの贈り物

西川 まりえ（和歌山県）

二〇二一年十二月三日、一通の封書が届いた。それは私が待ちに待っていたものだった。

私の夫はこの二日前にこの世を去った。三十九歳という若さだった。三十七歳の時に大腸がんが見つかり、余命二年と医師より伝えられた。辛いことは重なるもので、私は数ヶ月前に流産を経験していた。神様なんていない。本当にそう思った。

抗がん剤治療もスタートし、私たち夫婦の生活は一変した。初めてのことばかりだったが、日々希望を見出すことに必死だった。

そんな中、私たちは一つの決断をした。子どもを持つということだ。抗がん剤治療を始める前に、夫は精子凍結を行っていた。私は子どもの存在が生きる希望になると考えた。ただ苦しいばかりの日々に、明るい光が差し込むことを望んだ。抗がん剤治療に不妊治療と、お互いに大変

な日々が続いた。胚移植が上手くいかず、採卵からやり直しになった時は深い絶望感で真つ暗闇にいるようだった。

そして幸いにも私たちは一つの命を授かり、二〇二一年五月に男の子を出産した。その数日後の検査では夫の余命は半年と告げられた。しかし夫は希望を失うことなく治療を続け育児にも励んでくれた。息子のおかげで忙しくも笑顔が絶えない毎日を過ごすことができた。

そんな中夫が一枚の写真を撮った。夫の母と息子の写真である。この写真を昨年「愛顔感動ものがたり」に応募していたのだ。

夫は亡くなる一週間前深い眠りについた。耐え難い苦痛のため、命終えるその時まで睡眠薬で深く眠るという選択をしたのだ。その眠りの直前に、愛媛県の担当者の方から「受賞する可能性がある」と連絡を頂いた。夫はとても嬉しそうな表情を浮かべていて、これから死に向かうようには全く見えなかった。

亡くなって二日後のお通夜の日朝、夫宛の「入選」の通知を受け取った。悲しみに暮れる私たちに、早速夫からの贈り物が届いたようだった。愛顔と共に温かい涙があふれた。

「入選」

中国語の『授業』

大西 悠貴（兵庫県）

私が小学校低学年の頃、中国出身のS君というクラスメイトがいた。S君はなぜかクラスメイトにわざと足をかけてつまづかせたり、意味もなくからかったり、みんなが嫌がるようなことを頻繁にしていたので、友達が作れず、クラス全体を困らせていた。

ある日、S君が学校を休んだ折に、ホームルームの時間を使ってそのことを先生とみんなで話し合うことになった。口々に出るのはS君に対する非難ばかり。解決につながるような意見は全く出てこず、次第に重たい空気だけが漂い始めた。そんな中、あるクラスメイトがふとつぶやくように、

「S君は本当は寂しいんじゃないかな」

と言った時、思わぬ意見にクラス全体が驚いた。しかし、

「僕もそう思う」

という言葉がどこからか出たとたん、みんなが大きく首を縦に振り出した。腹立たしさ故に口に出せなかったものの、みんな同じことを考えていたのだ。本当はS君と友達になりたいという思いも同じだった。最後に先生が笑顔でこんなユニークな提案をした。

「S君に毎日、中国語を教えてもらうのはどうかな？」。

もう誰も反対する生徒はいなかった。

翌日からS君による中国語の「授業」が始まった。最初はとまどい、恥ずかしそうな表情を見せていたS君も、私たちが楽しさに目を輝かせているのを見てだんだん乗り気になっていき、生き生きと話し始めた。その「授業」は私たちの一番楽しみな時間となり、互いに親近感を持ったS君と私たちは、初めて本当の「友達」になることができたのだった。「人はちよつとした発想の転換で笑顔になれる」。この出来事はそれを私に教えてくれた。そしてそれは今も忘れない人生の教訓となった。当時のことを思い出すたび頬が緩み、何か温かい気持ちになれるのは、なぜだろう。

「入選」

お父さん　おかえり？

尾木　直子（滋賀県）

「あれ、まだいる」

キッチンに立つと、今朝も一匹のハエが飛んできた。お盆の初日に入ってきてからもう三日。うつとうしいと思いつつも、そのうちいなくなるだろうと放置してきた。

お盆って、あの世とこの世がつながる時期だよ。そう思ったとき、一週間ほど前に見た夢が、ふとよみがえった。

青空が見えていた。カーテンが風に揺れ、窓から姿の見えない何かの気配が入ってくる。それを、私と子どもたちが「今、おじいちゃんが来たんちゃう」と笑っている変な夢。

え？　もしかして、正夢だった？

じゃあ、このハエが、お父さん？

六年前に急逝した父。まだ小さかった子どもたちの野球の相手をしてくれた。練習や試合にもしょっちゅう顔を出してくれたっけ。

「お父さん。帰ってきてたんや。おかえり」

テーブルにとまっているハエに話しかけてみる。ハエは、じっと動かない。

「今日まで気がつかんでごめんな。まさかハエになつてるとは思わなんだわ」

ハエは、コシコシと手を動かしている。

「子どもらは、あいかわらず野球ばかり。次男もスポ少の野球部入つてんで」

いやいや、ただのハエやって。頭のどこかは冷静で、そんなことあるわけないと思いなながらも、涙がほろりとこぼれてくる。

「長男は、もう高校球児や。地方大会でホームラン打って、新聞に載つたんやで。ほら、ちよつと読んでみ」

止まらない涙を拭きもせず、ハエの前に新聞の切り抜きをそつと差し出してみる。なのに、ハエは、見向きもせず悠々と飛び去っていった。

うーん。やつぱりただのハエやん。

そう思ったら、今度はどうしようもなく笑えてきた。アハハとお腹を抱えて笑いながら、

「お父さん、好きだからここにいていいしな」

飛び回るハエに声をかけた。

「入選」

愛顔の通勤風景

荒木 孝宣（愛媛県）

大型連休を終えた五月の雨の朝。通勤バスの車内から、雨傘とランドセルを揺らして、歩道を走る小学生の姿が私の目に留まった。私は、バスの停留所のほうへ急ぐ小学生の様子に少し不安を覚えたが、間もなくバスは少年を追い越して、停留所に到着した。

停留所では、数人の乗客の乗り降りがあったが、その間にも少年はまだ到着していない様子で、私の不安は大きくなっていた。すると、こちらの胸中を察したように、運転士さんから「走っている小学生が見えたので少し停まります」と、車内アナウンスがあった。それを聞いて、私はほっとしたのと同時に、バスの車内にも無言の安堵感が広がっていったような空気を感じた。

バスの車内では、小学生にエールを送るように、どこかアットホームな雰囲気漂い、ほんのひと時の待ち時間ではあったが、とても穏やか

な時間が流れた。それから間もなくして、少年が停留所に駆けつけたようだった。

運転士さんが、マイク越しに「乗りますか？」と、少年に向けて明るく呼び掛けた。すると、少年からは「乗りませーん！」の元気な一声が返ってきた。そして、その直後の絶妙なタイミングだった。運転席から「乗らんのかーい！」のツツコミの声が飛び込んできた。しかも、それはとても温かみのある優しい声で。

私は、そのマイクパフォーマンスに、思わず声を立てて笑い、気が付くと、車内にも温かな笑い声が広がっていた。それから、小学生はバスに向かい頭を下げて、勢いよく歩道を駆けて行った。

運転士さんの優しい勘違いとユーモアに心が和み、バスの中のほのぼのとした空気感をとても心地よく感じた。この朝、温かな笑顔の輪に包まれた通勤風景は、いつまでも大切にしたい、愛顔の風景だと思った。

「入選」

借り

松本 智子（北海道）

「すみません、ごめんなさい。停めてください」

声が上がった。財布を忘れたのに気づかずタクシーに乗ってしまった。所持金は、ズボンのポケットにあった千円だけ。メーターは刻々とそこに近づいている。

「え？ スキー場はまだだべさ」

バックミラーに映る初老の運転手さんに目をやりながら、所持金がギリギリしかない事情を伝えた。その途端、丸く赤い「空車」の表示板がカタンと立ち上がった。

だが停まらない。圧雪の登り坂での停車は危険なのだろうか……。申し訳なささと自分の迂闊さに心が縮む。

「こんな所で降りても困るべさ。スキー場まで乗っけてっやる。千円でいいよ」

「え、あ、ありがとうございます」

思いがけない言葉に、右斜め前の運転席に向かってペコペコと頭を下げた。

反りが合わない上司や、陰口も聞こえる職場の人間関係に疲れ、ささくれただった気持ちで独りゲレンデへ向かっていた。そんな私の心に、運転手さんの親切が浸み込んだ。

「……」。ハッと気づいた。帰りの交通費が無い。どうしよう……。ほどなくしてスキー場へ到着した。

千円を笑顔で受け取ってくれた運転手さんは、窮屈そうに体を私の方へ斜めにねじりながら、千円札を3枚差し出した。

「帰りの交通費。昼ごはんも食べるべき。これで足りるかな？ 今度乗ってくれた時に返してくればいいよ」

札幌で営業する流しのタクシーに『今度』はあり得ない。私は名刺をもらい郵送での返金を約束し、お札と一緒に胸ポケットに納めた。

温かい人はたくさんいる。まずは、自分がそうならなきゃ、職場でも。タクシーを見送りながら、そうはつきりと思った。

お借りしたお金を返すために、手紙を書いた。

「―お陰様で、スキーを存分に楽しみ、無事帰宅することができました。いただいたご親切、忘れません。―」

あれから四十年以上が経つ。

お金は返したが、返しきれない大きなものが、風化することなく、私の中に存在している。

「佳作」

母が笑った

加藤 正雄（愛知県）

母は笑わない人だった。母の人生は辛いことがあまりにも多すぎた。七人の子どもの長女として農家に生まれた母は、まともに学校に行くことができなかった。幼い妹や弟たちの子守をしなければならなかったからだ。

結婚をしてからも、私の祖母に厳しくされ、朝から晩まで、田畑で働き詰め。赤貧に耐え、四人の子どもを育てた。母の顔から笑顔は完全に消えた。母の夢は教師になることだった。しかし、教師になることができなかったのも、その夢を三男の私に託した。

私だけが大学に進み、教師になった。母は大変喜んだ。だが、笑うことはなかった。その母が初めて笑ったのが、私が教頭に昇進した時だった。「母が笑った！」皺でいっぱい顔が観音菩薩のように見えた。うれしかった。爪に火を点すようにして貯めた貯金から、五十万円を私にくれた。母が笑顔で言った。「これでモーニング服を買いなさい」。「モーニング服を着るのは校長だけだよ」と何度も言ったが、母は納得しなかった。よほど、うれしかったのだろう。

不幸は突然やって来た。その年の十二月、初雪が降った早朝に、母は脳内出血で倒れた。それ以降意識が二年半も戻らずに他界してしまった。全く苦しまずに眠るように天国へ召された。

母が亡くなった半年後、父が後を追うように亡くなった。父が亡くなった次の年に私は校長に昇進。母がくれたお金でモーニング服を買った。私がモーニング服を着た姿を母に見せることはついにできなかった。

私は仏壇に校長の辞令を供え、「母さん、校長になったよ」と言った。おそらく、天国で母はあの笑顔で「よくやったね」と言ってくれたと信じている。

母は八十六年の生涯の中で、一度だけ笑った。あの素敵な笑顔は私の心の中に今も焼き付いている。母を笑顔にさせたことが私の唯一の親孝行だったかも知れない。

「佳作」

変顔

大石 さち子（神奈川県）

認知症がこれほど恐ろしい病とは知らなかった。以前からおかしな点は多々あったが何とか話は通じていた90歳の母がある日を境に全く会話が通じない魂の屍状態と化してしまった。問いかけには一切応えず意味不明な呪文のような言葉を呟き恐ろしそうな表情で両手で宙をかく。「お母さん、お母さん」と叫びながら体を抱くしかない二人の娘。興奮が収まるともう娘の名も顔も一切覚えていなかった。アルコール依存症の父の暴力と貧困に40年も耐え三人の子を育てあげた気丈な母。「母の体はそこにあるのにもう二度とあの優しく、かつ私たちを励ましてくれる言葉は聞けないんだ」と思うと切なかった。

そんな悲しいある食事時、棒の様に横たわった無反応な母の口を無理やりこじ開けて食べ物をつっこむことに疲れたのか、介助していた妹が突然変顔をした。スプーン片手に「ひよっとこ顔」をするときよとんとした母が次の瞬間「キヤツキヤツ」と大声で笑った。まるで赤児の様に。言葉を失って2ヶ月、初めての笑顔と笑い声だった。つられ

て私も手で鼻を押さえ「豚顔」をした。すると母は楽しげにまた「キヤツツ」と笑う。その目！無邪気で澄んだ昔の母の瞳であった。以来65歳と61歳の娘達は鏡の前で日々変顔の研究にいそしむ。暗黒の闇に一筋の光を見るために。母は一度やった変顔には反応せず「つまんない」といった表情をみせる。ゆえにマントヒヒ顔、ゴリラ顔、カバ顔、ワニ顔、オウム顔と必死の老姉妹。他人が見たら「いよいよおかしくなった」と思うであろう。

全ては母の愛顔のため、親子の絆をつなぎとめたいと願う私たちの命がけの戦いなのだ。

突如私達が「変顔」をすると認知症になってもリウマチの痛みからは解放されなかった母が、一瞬解き放たれたかの様な表情をする。変顔はもはや言葉を解さない母に神様がくれた最後の贈り物なのかもしれない。

「佳作」

マーガレットとピンクのバラ

松本 由佳（愛媛県）

駅を出て少し歩いた先にある寂れた小さな商店街の中ほどに、その花屋はありました。シャッター一枚分ほどの小さな店に、不愛想な体の大きなおじさんが一人。気の利いた花は無いけれど、日常の生活に溶け込むたくさんの花たちは、初めての一人暮らしをする私には、見ているだけで何とも言えない温かさを感じる特別なものでした。親に無理を言って進学させてもらったのだからと、必死で勉強や製作をこなしながら不慣れな家事をする日々。毎日やらなければいけないことに追われる生活にホームシックは当然で、もう家に帰りたいたい、気づけば涙が出ていました。

そんないつもの帰り道、花を飾って気持ち明るくしようと、おまじないのように自分に言い聞かせながら足早に花屋へと向かいました。ギリギリの生活をしていた私には高い花を買う余裕はありません。店頭の商品の一本百円の白いマーガレットを見つめ、

「すみません。一本だけでもいいですか？」

と声をかけると、いつもの無愛想な調子で、

「マーガレットやろ？ええで。いつも見とったもんな。一

番つぼみの多いの選んだるから、ちゃんと手入れしたら長くもつで。」

と、手早く包んでくれました。花があるだけで温かい気持ちになり、一本買っては大切に手入れし、茎だけになるとまた一本という生活を卒業まで続けました。卒業間近のある日、

「今までありがとうございました。このマーガレットのおかげで投げ出さずに頑張れました。卒業したら引越すのでこれが最後です。マーガレットを一本お願いします。」

そう言いながら百円玉を一枚差し出す私に、おじさんは初めてニッコリと笑顔を見せ、

「卒業おめでとう。ようがんばったな。はい、いつもの。それとこれは卒業祝いや。」

と、ピンクのバラの花束を渡してくれました。

泣き笑いでお礼を言ったあの日から二十余年。息子が大学受験に向けて励む今も、マーガレットとピンクのバラは特別な花です。

「佳作」

キャンサーギフト

井垣 厚子（大阪府）

息子達は就職が決まり、新たに住まいを移す時捨てるのを躊躇するものは、段ボールにとりあえず入れ自宅に送りつけてくる。いつのまにか納戸は段ボールの山になっていた。思い切って断捨離を決行しようと、まず長男の段ボールから開け始めた。四角いしっかりした紙箱が目につき、ふたを取ると日本赤十字社から贈られた金色有功章と書かれた感謝状と杯が出てきた。感謝状の文面には、献血一〇〇回という文字が踊っている。何とその感謝状と杯は、献血を一〇〇回以上した人に贈られるというものだったのだ。

三十七年前、私はガンにより胃全摘手術を受けた。術後、夫は執刀医から「三男君が小学生になるまで奥さんは生きられないと思います」と言われていた。その当時小学五年生と二年生と一歳だった息子達には、その病名を伝えることが出来なかった。

「菊咲いた 母の退院 いつになる」長男は文集にそんな俳句を残していた。

術後五年を何とか迎えることが出来た時、彼らは高校生と中学生と小学生になっていた。そして初めて彼らに、病名や手術の時の様子、そのさい沢山の輸血をしてもらったことなどを詳しく話してきかせた。

三十数年前長男の高校の入学式の日の記憶が、目の前に広がる。彼の高校の下車駅前の大通りに献血ルームの大きな看板が出ていた事を。

彼の若い元気な血が、私の感謝の思いと共に、輸血を待っている人への希望をつなぐバトン役になってくれたと思うと、目の奥に涙があふれた。

幼い子供を残して死なないといけないかもしれないという恐怖と戦い続けている間に、子供なりに自分の出来ることとお返ししたいと考えたのだろう。気がつけば思いやりの心を持った息子に育っていたこと、それは神様からガンになった私へのキャンサーギフトなのかもしれない。今の幸せを味わいながら、もう一度愛顔でゆっくりと感謝状を読み直した。ありがとう。

「佳作」

今でも生き続ける祖父の笑顔

紅谷 希望（山形県）

生まれた時から一緒に住んでいた祖父は、幼い私にとって一番の友達であり一番の良き理解者だった。共働きの両親に代わって育ててもらったと言っても過言ではない。

私の特等席は、祖父のあぐらの中。いつも「お邪魔だな」と言う祖父は、嬉しそうに顔をクシャツとさせて笑っていた。トランプで負けてくれた時も、腕相撲で負けてくれた時も、いつも笑っていた。

毎年貰うお年玉を必ず貯金していた私。その理由を聞かれ「いつかおじいちゃんが病気になる時に薬を買うんだ」そう話すと祖父は涙を流していたけれど、やっぱり嬉しそうに笑っていた。そんな祖父の優しく温かい笑顔が大好きだった。

ある日突然、祖父は倒れた。真っ白なベッドの上で横たわる祖父の姿を見て、幼い私は泣く事しか出来なかった。次の日も、またその次の日も、一か月経っても祖父は眠っていた。99・9%目覚める事は無いと医者に言われた帰りのバスで、祖母はもう楽にしてやりたいと言った。その言

葉に、間違っている！と必死で訴えた事を覚えている。

それから毎日、眠る祖父に笑い話し掛けた。泣く事ではなく、笑う事を沢山教えてくれた祖父に、毎日毎日笑い話し掛けた。すると、祖父の指が動いた。家族は気のせいだと言った。次の日も笑い話し掛けた。すると今度は口が動いた。有り得ない事だと家族に笑われた。それでも私は諦めず、何度も笑い話し掛けた。

そして祖父が倒れてちょうど40日目、祖父は目を覚ました。病室に着くと、そこには優しく笑っている祖父の姿があった。祖父も私も涙が止まらなかったが、顔はしっかりと笑っていた。

それから二年後、祖父は天国へと旅立った。

もう二度と祖父の笑顔を見る事は出来ないが、目を瞑れば昨日の事の様に甦る。

私は、二児の母になった今でも、あの時貰った祖父の大きな「愛」と「笑顔」を決して忘れない。

「佳作」

父の免許証入れ

篠原 恵（北海道）

「お父さんがちょっとおかしいの。」母から連絡が来て数日後、父は閉鎖病棟に入院した。自衛官だった父は丈夫な体をしていたが、酒豪ゆえ何度か病院のお世話になっていた。

父と折り合いの良くなかった私がなぜかいつも付き添うことになる不思議。深夜にタクシーで救急当番病院に駆け込んだこともある。市外の病院に救急車で搬送された時も私が同乗した。病院に付き添う時が、父に向き合い優しくできる唯一の時間だったように思う。

検査結果を聞く時、私はいつも覚悟していた。今回こそ重病が見つかって余命宣告を受けるかもしれない。しかし私の心配に反して、毎回太鼓判を押され退院してきた父である。

退院日にホテルの高層階にある日本料理店に誘い、初めて父にランチをご馳走した。母から「あの時、お父さんはすごく嬉しかったみたいで感動していたのよ」と聞き、私も嬉しく思った。あれから何年たっただろうか。

私は今、その日本料理店で働いている。就職が決まった時、喜んでくれた両親をいつか招待したいと思っていた矢先、コロナ禍に突入。その最中に父が認知症になったのだ。

入院前日、父のベッドに並んで座っていた。「私、どこで仕事しているか分かる？」と聞いても答えはなかった。「もっと若い時にお前と話す時間を持てたらよかったな」と父が言った。なぜ父がそう思ったのか聞かなかったことが悔やまれる。その言葉は父がほんの一瞬、正気に戻った時の本心のように思う。

父の免許証入れに入っている写真を思い出した。大きなウサギのぬいぐるみを抱いた3歳の私を、父が膝にのせて頬を寄せている写真だ。中学までは父と喧嘩するたびに捨てられたんじゃないかとチェックした。最後に見たのはいつ？ 父はあの写真をどうしたのだろう…。認知症で免許証を返納する日も近い。無性に見たくなり探した。古びた写真を見つけた時は思わず安堵の息を漏らした。若き日の父と幼い私が、ともに愛顔で写っていた。

「佳作」

アン・デイ・フロイデ

木村 敬子（滋賀県）

父は六十五歳、楽譜も読めないし、ドイツ語も初めての状態で第九の合唱団に参加した。私は仕事の傍ら、そこでチェロを弾いていた。親子で同じステージに立つのが父の夢で、父は一日も休まず練習に参加し、テノールの音域で堂々と歌えるようになった。父と私は練習時によく目が合い頷き合った。本番間近のある日、父は脳梗塞で倒れ、左半身麻痺となり構音障害も伴った。父は突然の自分の体の変化にいらいらして涙を流すばかりであったが、しばらくして、リハビリを受けるようになった。左半身の運動機能を訓練に加えて、パタカラ体操やベロ運動などの発音訓練を毎日、五時間くらい続けた。そして何とかゆっくり発音できるとなり、表情も少し明るくなった。「オーフロイデニヒト……」父は第九のCDを聴きながら、最初の部分を一週間かけて練習した。一段を一週間くらいのペースで、半年くらいかけてやっと歓喜の歌の最後、「ヴォーダイン……ヴァイルト」まで辿りついた。

そんな時、先生やりハビリの方々や看護師さんが父に内

緒でステージを用意してくれていた。第九の仲間も何人も駆けつけてくれた。

「お父ちゃん、病院のロビーで歌ってみたら。お父ちゃんと私のロビーコンサートや」

「そんなこと言われても、お父ちゃん、発音もまだうまいことできんし、人前では無理や」

「リハビリの先生も第九の仲間も皆応援してるんや。お父ちゃんも一生懸命練習したやないの。堂々と歌って元気になったとこ見せて」

父は決意して、黒の衣装で背筋を伸ばし、「フロイデシエーネル……」と堂々と歌った。ガラス越しの夜空に届くような響きだった。最後、病院のスタッフの方々、患者さん、第九の仲間、皆で「晴れたる青空……見かわす我らの明るき笑顔」と日本語で歌ってくれた。惜しめない拍手に包まれて、父と私は涙で抱き合った。皆が父を見守り励まし、一歩ずつ前に進む道標を作ってくれた。素晴らしい邂逅、父も私もまた弾みをつけてジャンプ、ブラボー。

「佳作」

のっぽさんのメッセージ

森田 剛（広島県）

仕事で上海に住んでいた頃、週末によく近所の公園を散歩した。一周するのに一時間もかかる大きな公園はいつも、思い思いの活動を楽しむ地元の人たちで賑わっている。太極拳、社交ダンス、のど自慢が集う素人歌謡ショー……。公園はちよつとしたテーマパークのようで、飽きることがなかった。

ある時、公園の隅の目立たない場所に小さな花畑とそれを取り囲むように置かれているベンチを見つけた。公園内の喧騒から離れ、そこで休んでいると、一人の中年男性が別のベンチの横に譜面台を立て、サククスを吹き始めた。私は直ぐに彼の奏でる音が好きになった。チューリップハットをかぶっていたので、昔好きだったテレビ番組にちなんで、私は彼のことを「のっぽさん」と呼ぶことにした。翌週も同じ時間に行くと、のっぽさんはやはり一人でサククスを吹いている。ここで彼の演奏を聴くことが、週末の楽しみになった。

いつも淡々と演奏しているのっぽさんだが、どうやらべ

ンチに座る人の顔ぶれを見て選曲しているらしいことに、やがて私は気づいた。カップルが語り合っていればムードのある『煙が目に染みる』を、親子連れなら曲に合わせて踊れる『ラ・バンバ』をという風に。公園のその一角はとても心地よい場所だった。

しばらくして、私は日本へ帰任することになった。本社での苦手な社内調整業務が新しい仕事だ。気分は晴れなかつたが、帰国前の週末も私は公園へ行った。のっぽさんがちらつと私の方を見たあとに吹き始めたのは、初めて演奏を聴く『瀬戸の花嫁』。私は自分が日本人だとも、ましてや来週帰国すると彼に告げたわけではない。たまたまだったのだろう。だが私は「高揚感に満ちた上海の仕事はもう終わりだよ。日本でも頑張っつね」と励まされている気がして、前向きな気持ちになれた。

演奏が終わると彼に聞こえるように拍手をした。のっぽさんは私を見て一瞬照れたような笑顔を浮かべ、また別の曲を吹き始めた。

「佳作」

駆け抜ける、スーパーマザー

塩田 きよら（東京都）

母は今、教習所に通っている。小型二輪免許取得のためだ。五十歳を超えた母がバイクに乗りたいと言い出したときには驚いたが、実は昔からの憧れだったらしい。

物心ついたときから記憶のなかの母はいつも忙しく働いていた。朝早くに起きて家族のご飯を作り、離れたくないと泣く私と妹をなだめてから保育園に送り届けて、その足で職場に駆けていく。そして午後六時の鐘が響くと、夕焼けに染まる園庭に母は再び現れる。手には今晚の献立に使う食材を、顔には疲れを感じさせない笑みを携えて。その頼もしい姿は映画に出てくるスーパーマンのようだった。そんな母の口癖は「やりたいことは全部やりなさい」だ。母が高校生だった頃、当時はまだ根強かった女子教育に対する偏見のせいで、行きたかった大学への進学を諦めてしまったらしい。いつも明るい母の顔がこの話をするときだけは険しくなる。だからこそ母は、私たちにはやらずに後悔をしないでほしいのと言う。心配性な私の背中を、母は何度も力強く押してくれた。

そうやって育ててもらった私は二十一歳、妹も来年大学生になる。妹に振袖のチラシが届いたのを見て母は「もうすぐ子育ても卒業だ」と笑った。教習所に通い始めたのはその数日後のことだ。

教習所で母は最年長らしい。教習路の道順も全然覚えられないし、バイクに乗った次の日は腰も肩も痛い、と悲鳴を上げている。母は無敵のスーパーマンではなく、痛みや苦しみを感じ、苦手なことだってある、私と同じ人間だったのだ。いや、本当はずっと前から知っていた。笑顔に浮かぶ目のクマや、寝ぼけていつも結末が変わる昔話。私たちにやりたいことをやらせるために、母がどれだけ身を削って支えてくれたか。だから今度は私が応援する番だと思う。だって小型二輪免許は母にとって久々の、自分のためだけに掲げた夢なのだ。晴れわたる空の下、颯爽と駆け回るバイクを見られる日が待ち遠しい。くれぐれも安全運転で、ね。

「佳作」

ゆうしやのしるし

佐藤 栄児（東京都）

「ねえ、おともだちの手にはこういう赤い色がないんだって。」

保育園の帰り道、自転車をこぐ私の後ろで、4歳の次男が弱々しくつぶやいた。彼の左手の甲には生まれつき大きなあざがある。私は個性があつてよいではないか、と気に留めていなかったが、心配性の妻は皮膚科に相談したことがある。主治医は「特に悪いものではないです。一般的なあざなので消えることはないですが、年齢とともに目立たなくなることもあります。」と話していたそうだ。妻が懸念した意味がようやくわかった。

「なにかお友達にいわれたの？」と聞くと、次男は答えなかった。私は「世界にひとつだけのあざだし、おとうさんはカッコいいと思うよ。大きくなると色がうすくなるかもしれないってお医者さんはいつていたみたいだよ」と伝えた。

「ふーん、そっか」と、次男は釈然としない様子で答えた。家に帰りそのことを妻に伝えると、「そっか」と心配そう

な様子で答えた。

ある日の夕飯時、次男が同じ話題を口にした。すると、となりに座っていた7歳年の離れた長男がこう話した。

「えー、そのあざって勇者のしるしじゃん。ぼくの好きなゲームの主人公の左手に同じようなあざがあつて、ピンチになると光るんだ。そしたらめっちゃ強くなつてね、みんなを助けるんだよ。」

本気でうらやましがる兄を見て、次男はひまわりの様な笑顔を咲かせた。

年を重ね、手が大きくなるにつれ、次男の左手のあざは目立たなくなってきた。時々手の甲を見ては「勇者のあざが消えちゃったらいやだなあ」と話し、その度に顔を見合わせて愛顔になる私と妻であった。

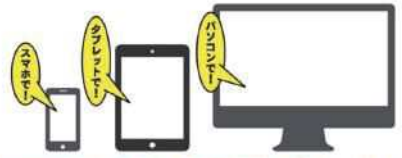
大きな文字で いつでもどこでも 1週間分まとめて読み



いつもの愛媛新聞を スマホ・タブレットで。

キーワード検索など便利な機能も満載。
詳しくはお申し込み WEB サイトで!

- 愛媛新聞ご購入契約者(個人)は、追加料金なしでご利用いただけます。
- 電子版のみのご契約(個人)も可能です。利用料(1ヵ月)3,400円(税込み)



こども新聞やリックの電子版も見られます!

「ジュニアえひめ新聞 スマイル!ピント」 毎週日曜発行
 小学校高学年~中学生向け、話題のニュースをやさしく解説、学びに役立つ記事も盛りだくさん。
 「ウイークリースひめリック」 毎週金曜発行
 旬の話題や地域イベントの情報が満載。グルメやレジャー、住まいなどの生活情報も充実。



電子版のご利用には、
 アクリートくらぶ読者会員登録が必要です。
 詳しくは、【二次元コード】もしくは【検索】で!!



お問い合わせは愛媛新聞電子版サポートセンターへ

TEL089-935-2001

【受け付け時間】●平日/午前9時~午後7時 ●土・日・祝/午前9時~午後6時

地域に根ざす、
 信用金庫として。
 手から手へ。
 心から心へと。
 つなげてゆきたい
 想いがあります。

未来へ。



愛媛信用金庫

『地域とともに、未来をえがく』

住友金属山株式会社
 住友化学株式会社
 住友重機工業株式会社
 住友共同電力株式会社
 住友林業株式会社
 三井住友建設株式会社

安心と信頼の絆で、 未来に寄り添う。

くらしの保障、相談するなら



- ご加入にあたりましては、お近くのJA(農協)へお問い合わせください。どなたでもご相談いただけます。
- JA 共済ホームページアドレス <https://www.ja-kyosai.or.jp>

「エピソード部門」高校生以下の部

憧れの存在

村井 珠夏（愛媛県 高校生）

「いっぱい努力して造船業に就きたい」

八年前の冬、将来の夢をステージで発表した。寒さと緊張で震えていたけど堂々と言った。

造船に興味を持ったのは母の影響だ。幼い頃からずっと溶接をしている母に憧れていた。母に初めて夢を相談した時、女性は少ないし安全とは言い難い仕事だと教えてくれた。そして時間はまだまだあるし、ゆっくり考えろと言われた。どうやら母は私が本気で言っていることに気付いていなかったようだ。

高校は造船の知識や技術が身に付けられる工業高校に入学した。専門的なことを学んだり実習をしたりするのはとても楽しい。ある日、工場見学で実際に現場で活躍している職人さんを見た。やりがいを感じる瞬間を聞いてみると進水式で船が初めて海に浮かぶ瞬間だと言っていた。

私もこの感情を味わいたいと思い造船に対する思いがさらに燃えた。

夢に向かって頑張る高校生としていくつかの取材を受けた。頑張ったことは勉強と部活と資格取得だ。資格取得は独学のため毎日深夜まで勉強して無事一発合格できた。夢を実現させるためにどんな事にも全力を注ぐと決めている。インタビューでは、造船に興味を持ったきっかけと母の好きな所を聞かれた。五人のスタッフの後ろで母が見守る中、少し照れくさいけど母の自慢をした。チラリと母の方に目線を遣ると袖を顔に当てていてよく顔が見えなかった。全ての質問に答え終わり、次は母の番だ。私の夢についてどう思うかを聞かれていた。母は「本気でこの仕事をしたと言っていて驚いたけど、頑張っている姿を見て応援したくなった」と答えた。初めて母の思いを知った私はこれからも努力し続けて母を越す勢いで頑張ろうと、大粒の少し温かい涙を拭いながら決心した。

母の子供に生まれてこられたこの奇跡。そして、女手一つでここまで私を育ててくれた母には感謝しかない。お母さん、いつもありがとう。

「特別賞」

愛顔の波紋

岡田 若子（愛媛県 高校生）

私には六歳離れた兄がいる。兄はダウン症と先天性心疾患があり、これまで沢山の手術を乗り越えている。「ダウン症は天使」と言われるとおり、心穏やかで透き通った心の持ち主だと思う。しかしいつしか私は、その優しく輝く満面の笑みの影を探すようになった。

私はこれまで、兄の事を不憫に思うと同時に自分を責める時が多々あった。私が学校や習い事で沢山の賞状を手にした時、兄の体には沢山の傷痕が刻まれた。私がスポーツを手にした時、兄はドクターストップをかけられていた。又、兄が先に始めた習い事の試験も、部活等で欠席が多かった私が先に合格した。

—私は兄の分まで奪っているのではないか—
瞳の輝きが羨望の様に感じ、「若ちゃん凄いな、おめでとう。」と言う兄の言葉を聞き入れたくない時さえあった。

そんな、心が晴れない日が何年も続いていった時、兄が私のステージ発表を観る為学校に来た。兄は元々私と一緒にダンスを習っていたが、手術後大好きなダンスが禁止された。ステージ発表本番、私は溢れる拍手と熱気に充足感を得た。私の帰宅を待っていてくれた兄が飛び出してきて、「若ちゃん凄かったあ。心がウキウキした。」と、体を揺らして言った。母が「若ちゃんが楽しそうで嬉しそうな顔が好きなんだね。」と言った。そこには、愛顔で私の顔を覗き込む兄がいた。

他者の喜びも自分の喜びであり、多くの人から頼りにされている兄を見て、私の心配が杞憂であった事が分かった。家族、旧友、同僚、恩師：沢山の人に恵まれ、目標へ向かって輝く瞳は一点の曇りもない。私が私らしく輝く姿が好きだと言ってくれる兄。気付けば私も兄の愛顔に幸せを感じている。他者の喜びも自分の幸せになる、愛がそこにある。その愛の輪が広がって、いつでもどこでもみんなが愛顔でいられますように…。

「優秀賞」

妹の思いやり

渡邊 滂羽（愛媛県 高校生）

その光景を見たとき、自分を含め周りの大人が驚き、衝撃を受けた。

私には五歳離れた妹がいる。その妹が幼稚園に通っていた五歳のときの話である。

その年の秋、毎年恒例の運動会が開かれた。それを今年も、私は家族で見に行った。そのとき小学五年生だった私は「幼稚園の運動会なんてつまらないんだろ？」と勝手に思っていた。妹があんなことをするまでは。

「パン！パン！」

銃声が響き、音楽が鳴った。運動会が始まる合図だ。最初は、園児がグラウンドに入場し、体操をした後、競技が始まった。

皆がかっこをしていたときである。どの子も速い。どんどん妹の順番が迫ってくる。これまで妹は、一位になったことはなく、去年も一昨年も最下位だったので、もう少し頑張って上位を目指して欲しいと思った。

「よーい、ドン！」

妹のいる列が一斉に走り出した。やはり妹は遅く、後ろの子にどんどん抜かれていく。気がつけば、もう最下位になっていた。前の人との距離がだんだん開いていく。私はそれを見て、「今年も無理かな。」と最下位を確信していたときだった。

「痛っ！」

一つ前の子がコーナーでこけてしまった。皆が心配しているなか、私は「抜け！」と妹に必死で叫んだ。そのときなんと、妹はその子に手を出して助けたのである。

その光景を見たとき、自分を含め周りの大人が驚き、衝撃を受けた。

結果は結局最下位だった。私は運動会が終わったとき、なぜ助けたのか聞くと、五歳とは思えない答えが返ってきた。

「だってあの子は私の友達だもん。こけたら助けるのが当たり前でしょ。」

それは私の自慢の妹だ。

「優秀賞」

願いの横断幕

土井 倫太郎（愛媛県 中学生）

僕の祖母は、二年前に腹膜播種というお腹に癌が散らばっている病気になりました。癌の中でもステージ4という最も治癒率の低いもので、転移もあちこちにありました。

考える暇もなく抗癌剤治療が始まり、祖母は髪の毛だけでなく眉毛、まつ毛も抜け落ち、指先は変色して痺れ、強烈な吐き気に襲われました。しかし治療は待ってくれません。油断すると癌細胞が再び動き出してしまふからです。あつという間に手術の日が決まり、子宮、卵巣、直腸、大腸の一部を全部取るという大手術になると聞きました。

しかし、この頃祖母は気力も体力も限界がきていました。声をかけたたくても励ましたくても、コロナ禍で僕達が病院に入ることはできません。このままではいけないと感じた僕はいとこと相談してある作戦を決行しました。僕を入れた六人のいとこと一緒に横断幕を作ったのです。祖母の病室は十二階で、少しくらいの大きさの文字では見えません。一文字を畳一畳くらいの大きさにしてみんなで絵の具まみれになりながら、大きな大きな横断幕を作りました。

手術の前日、祖母に「窓の外を見て。」と電話をし、電話をつないだまま外を見てもらいました。祖母が泣き崩れたのが分かりました。祖母が見たのは、色とりどりの「がんばれ」の文字と笑顔で飛び跳ね手を振る僕達でした。

あの日から一年。祖母は好きなものを食べ、好きな所に掛、闘病前と変わらない生活をしています。

今の状態まで回復したのは、お医者さんや看護師さんなどたくさんの人々の力があつたからです。でも僕は知っています。目に見えない生きるパワーを与え、闘う力を与えたのは僕達だということを。願う心は奇跡をおこすということ。

夏休み、祖母は僕達とおいしいケーキが食べたいそうです。仕方なく付き合っつてやるかな。

「優秀賞」

母の分身

宮本 弥怜（愛媛県 高校生）

もこもことした髪の毛に、まあるい輪郭の顔。面白おかしい表情をしたり、ポーズをとってみせたりする。

ちよつとしたメッセージとともに、紙の隅のほうにいる母の分身。私が幼い頃から、母はいつも楽しそうにそれを描いていた。「洗濯物畳んどつて」との伝言メモには、口笛を吹きながら山のような洗濯物を畳む分身、「お菓子あるけん食べさいや」とのメモには、口いっぱいにクッキーを頬張る分身がいた。その微笑まじさたるや、見ているこちらまで笑顔になってしまうほどだ。

中でも、印象深かった分身がいた。私の祖母が骨折をして入院していた頃のことだ。祖母の見舞いのため、母は帰りが遅くなることが多く、学校から帰ると家には私ひとりきりだった。祖母の容態や母の帰りが心配だった上、外も暗く、しんと静まった家にいるのはかなり不安だった。そんなある日、台所のテーブルの上に、一枚の紙が置いてあるのを見つけた。「お見舞いで遅くなるよ」と書かれた横には、やはり母の分身がいた。彼女のだけではなかった。

私と祖母の分身もいたのだ。楽しそうに笑い合い、食卓を囲む分身たちの姿を見ると、思わず顔がほころんだ。つい先程まで張り詰めていた空気が穏やかに溶け出し、私を包むのを感じた。

「ああ、大丈夫だ。」

と自然と思えた。その後、祖母は無事に退院することができた。母特製の蒸しパンを味わいながら、おいしいね、幸せやね、と皆で言い合った。母は私と目が合うと、にかつと笑っていた。あのとときの分身たちの姿は、現実のものとなったのだった。

「自分のペースで頑張るなさいや。応援しとるよ」。勉強机に置かれたメモから、にこやかに私を見守る母の分身。「ありがとう。頑張るよ」。その横に、そつと私の分身を描いておいた。

「入選」

祖母と足踏みミシンと・・・岡中 由依（愛媛県 高校生）

私と祖母の協力物語。それは、高校一年生の時の夏休みまで遡る。

夏休みの宿題として出された「愛媛ホームプロジェクト」。私は古着でエコバックを作ることにした。ビニール袋が有料化された時だったので、丁度いいと思ってそれにした。

授業の時ぐらいしか裁縫をしてこなかった私が一からエコバックを作るなんて時間はかかるし、どんな布を使えばいいか分からないが、何の不安もなかった。なぜなら私の祖母は縫い物屋。裁縫のプロなのだ。とても力強い味方である。

祖母は私が手伝ってほしいとお願いすると心良く「いいよ。」と言ってくれた。そこから私と祖母の夏休みがスタートした。

二人でどの古着を使うか、型取りはどれくらいか、色々なことを相談して決めるのは楽しく、祖母も目をキラキラさせて色々なことを教えてくれた。一番苦労した足踏みミシンに關しても慣れない手つきの私に対して最後まで根気

よく付き合ってくれた。

私がこの夏に得たものは完成したエコバックだけではなかった。

それは祖母の思い出だった。「あの足踏みミシンはねえ、私が嫁入り道具として持ってきたものなのよ。」などの祖母と裁縫、祖母の母の話などを聞くことができ、色々なことを知れた。また、意外と祖母と私はあまり話をしなかったんだなあと思われられた。毎日祖母の話を聞きたびに、絶対に完成させようという気持ちが強くなった。

タイヤを勢いをつけて回す。そしたらペダルをキコキコと足で踏む。すると針が動き出す。全身を使う足踏みミシン。不器用な私には大変だったけど、少しずつ出来上がっていくのがすごく嬉しかった。そして、そんな私を見守る祖母も嬉しそうだった。

今はもう祖母は裁縫が出来ない。目も体もすっかり弱くなってしまった。だけど大丈夫だよ。祖母の裁縫は私が受け継いでいるよ。

少し、ぶきっちょ、だけどね。

「入選」

私の友達

渡部 日陽（愛媛県 高校生）

「おはよう」

この言葉は、私に勇気をくれました。

私は去年の秋頃に学校へ行けなくなりました。特発性過眠症という病気を発症したからです。自分の身体のどこにも異常はないのに眠り続け、一日に二十時間寝ている日もありました。見た目も中身も異常がないのに、学校へ行けないことは苦痛でした。それに、友達みんな毎日ちゃんと学校へ行っていて、それが羨ましいと同時に罪悪感を感じました。

それから少し時間が経って、午後の授業を受けられる間に起きられるようになりました。しかし、学校には行けませんでした。なぜなら、理解してもらいにくい病気で長期間休んでいたのです、友達の反応が怖かったからです。最初は、家を出る支度をするだけで腹痛を起こし外に出られませんでした。私がいなくても世界は回って、誰も困らない。そんな風にまで思い詰めていました。

しかし、そんな時に一つのメッセージを貰いました。友

達からの一言でした。『みんなひよりちゃんを待つてるよ。はやく会いたいな。』私はこれを見た次の日、学校へ行きました。

お昼の後、掃除の時間に教室へ着きました。緊張で泣き出しそうな瞬間に、突然抱きしめられました。メッセージをくれた友達でした。そして、「おはよう！」と大きな声で言ってくれました。それから、沢山の人が教室に帰っては「おはよう」や「よかった」と声をかけてくれました。自分の居場所はちゃんとここにあったのだと、嬉しくて泣きそうでした。なので、あの日、あの時メッセージをくれたり、暖かく迎えてくれた友達には感謝してもしきれません。

だから私は、この一言が誰かに勇気と自信になるようお願いしながら、毎日元気に言います。

「おはよう！」

「入選」

すごいね、まなちゃん

大野 愛未（愛媛県 高校生）

「すごいね、まなちゃん」

そう言っただけ母はどんなささいなことでも、必ず褒めてくれる。トイレ掃除をした時、宿題頑張った時、料理を作った時、どんな時も大げさなくらい褒めてくれた。中でも、特に褒めてくれたのが部活動だった。私は中学生になって卓球部に入り、卓球にとっても力を入れていた。しかし、全く勝てなかった。それでも毎回試合を見に来てくれた母は「すごいね、まなちゃん」と私を褒めてくれた。それが嬉しくて高校も卓球部に入った。しかし母は病気で見に来られなくなった。母が来られなくなってから、練習の成果が出始めたのか勝てるようになり、家に帰ってから必ず結果を報告した。母はどんな結果でも必ず褒めてくれた。そんな母が空に旅立って、初めての大会が高三の総体だった。今まで自分の思うような結果を残せなかった私もたくさん努力し、団体メンバーに入り試合に出られた。その試合を父が見に来てくれた。父が試合を見に来たのは今回が初めてだ。カッコいい姿を見せないと、という思いがプレッ

シャーになり、手の震えが止まらなかった。その時父が私に「大丈夫。大丈夫。」そう言ってくれた。そこから落ち着きを取り戻した私は、今までで一番のプレーで勝つことができた。勝つてすぐ観客席を見上げると、父が拍手してくれていた。その隣に、母の姿が見えたのだ。父に向かって「まなちゃん、すごいね」って言いながら拍手をしている母の姿が。生きていたらきつとこんな感じなのかなと思いい、涙をこらえながら仲間の応援に戻った。家に帰って見た母の写真は、心なしかいつもより笑っているように見えた。

今もことあるごとに私には母が見える。きつと空から見守るのに飽きて、時々見に来てくれているのだろう。この作文を書き終わったらまた言ってくれているはずだ。

「すごいね、まなちゃん」って。

「入選」

輝き

坂本 瀬菜（愛媛県 高校生）

私は、みんなの顔を知らない。高校に入学してから今まで、みんなの顔の半分はマスクに覆われたままだった。高校で出会った友人や先輩後輩とは、マスクを外し、向かい合って話したことはない。みんながどんな顔をしていて、どんな顔で笑ったり泣いたりするのか、知らないままだった。

そんな高校生活も最後の年にさしかかっていたある日。担任の先生の離任が決まった。私は寂しい気持ちで目を伏せて席に座っていた。先生の最後の話が終わり、写真を撮ることになった。みんなで列になって、その真ん中に先生が入る。みんなの笑い声が教室に響く。何枚か撮ってから「じゃあ次はマスク外そう」と先生は言って、それから花束を抱えたまま振り返った。「ただし絶対にしゃべるなよ」その一言で教室は一瞬にして静かになった。みんながマスクを外していく。そしてただまっすぐ前を向いて、口を一文字に結んだままポーズをとった。はい笑ってー、と言われてそのままぐいと口角を持ち上げる。しんとした教室に

シャッター音が鳴り響いた。撮り終わってマスクをつけた途端、またわいわい話し出す。ふと振り返って見たみんなの目は、うるんでいるのかさらさら輝いていた。

知らないわけじゃなかった。新しいクラスになったばかりで伏し目がちだったときも、劇を見て目に涙を溢れさせていたときも、クラスマッチの結果に目を細めたときも。書ききれないくらいの高校生活の中で。私はずっと、みんなの目を、表情を、しっかりと心に刻むことが出来ていた。今私の手元には、三枚の写真がある。マスクをしている写真、マスクを外している最中の写真、そしてマスクを外した写真。いつかこの写真を見ながら思い出すのだろう。マスクをして、目を輝かせた、懐かしい高校生活を。

「入選」

約束券

向井 絢菜（愛媛県 高校生）

交換ノートの最後のページに書かれた「約束券」という幼馴染の文字。私にとって唯一無二の宝物。

三年前、私は、髪が抜け落ちる病気を発症した。四年間伸ばしたお気に入りの長い髪は、私の意思に反してどんどん抜けていった。私には、耐え難い現実だった。治ると信じてあらゆる治療法を試したがなかなか効果は得られなかった。将来、すべての髪が抜け落ちてしまうのかと不安に駆られる日々を過ごしていた。周囲に気づかれることも多くなり、ついに私は、伸ばしていた髪に別れを告げた。そして、ウィッグという悪夢の言葉が、私の頭をよぎるようになった。自分の髪ではないことへの嫌悪感とウィッグに気づかれたときの周囲の視線が怖かった。正直、自分がウィッグをつけている姿を想像するだけで、なんだか悔しくてたまらなかった。

病気が発覚してから、突然髪が触られるのを毛嫌いし、席も一番後ろが続く私に幼馴染は、以前の私との変化に違和感を覚え、たびたび優しく聞いてくるようになった。つ

いに私は、打ち明けることにした。彼女は私の悩みに、気づけなくてごめんねと何度も言った。彼女にとって私が一人で抱え込んで隠していることが悲しいということを知り、私はもつと早く相談すればよかったと後悔した。彼女は、「私、絶対、将来、美容師になって、可愛いウィッグ作るから。」と言ってくれた。

そのあと、一冊の交換ノートをくれた。そのノートの最後には「約束券」と書かれてある。いつも私の味方でいてくれ支えてくれた親友が書いてくれたものだ。その文字を見るたびに励まされ、もしウィッグが必要になったとしても、沢山お洒落をしようとかポジティブに考えられるようになった。今は、より様々な治療が行える病院に転院し、治療に励んでいる。

もう二度と彼女を苦しめることがないように交換ノートには悩みごとはもちろん他愛もないことも沢山綴っている。そしてこれからも私たちを繋いでくれる一生の宝物だ。



「やさしく触れていいですか。」
 エリエールの
 そして地球のために。
 からだのために。
 気持ちのために。
 力強い「Yes!」をもらえるように。
 この問いに、世界中のすべての人から、
 「やさしく触れていいですか?」
 深くかわっていきます。
 そんな「スキンシップ」を通して、
 ひとりひとりの幸せと、
 追い求めていきます。
 「どこまで人間にやさしくできるか」を
 なによりも「品質」にこだわっていきます。
 私たちエリエールは、
 ひとの肌、直接ふれるものだから。
 みんなの、すくそばで働くものだから。



やさしく触れていいですか。

大王製紙株式会社 <https://www.elleair.jp>



もっと、
この街の声をかたちに。



この街に、あってよかった。



「フジがあってよかった。」
 街のために、お客さまのために、
 わたしたちができることはなんだろう?
 これからもフジは、お客さまの声と想いを集め
 もっと楽しい、ワクワクする、ホッとすることを、
 お届けしていくために、進化していきます。
 もっと、あなたの「この街に、あってよかった」へ。
 わたしたちフジのこれからも続く挑戦に、
 ご期待ください。



本部/松山市宮西一丁目2番1号



感動を、けずりだそう。

マルトモ



盛り付け例：ソフトけずり



鹿児島県枕崎製造のプレミアムなかつお枯節を使用。
 「おいしさ1.5倍」の琥珀色が特長です。 ※当社一般品比

広告

好評
発売中

「プレ節」25ミクロン
花けずり



259袋 / 50g袋

「プレ節」25ミクロン
ソフトけずり



209袋



1.59×12袋

【本社】〒799-3192 愛媛県伊予市米湊1696番地 TEL. (089)982-1151

マルトモ <https://www.marutomo.co.jp>



作品募集案内

令和5年度もみなさんが体験した愛顔あふれる感動の「エピソード」と、みなさんが撮影した愛顔あふれる感動の「写真」を募集します。ぜひご応募ください。
 詳細は4月以降に愛媛県のホームページなどでお知らせします。



【お問い合わせ】 愛媛県観光スポーツ文化局文化振興課 ☎089-947-5480

「写真部門」

知事賞

また乗せてね♪

橋本 圭右(愛媛県)

4世代で花見をした時に、じいじが乗せてくれました。しんどいぞ～と言いながらも、嬉しそうにずっと一輪車を押す姿と、大好きなじいじに乗せてもらってご満悦な子どもたちを撮りました。



特別賞

愛顔で味バトン

忽那 博史(埼玉県)

帰省したときの楽しみのひとつでもある、母の手料理。自慢の手作り唐揚げは、スパイスが効いていてやわらかくとってもジューシー。ずっと食べていたいけれど、母も高齢となり長時間の立ち仕事がちょっと厳しくなってきました。ならばその味を受け継ぐべく、娘が母の味のバトンを受け取ることにチャレンジしています。

河原学園賞

元気に大きく育ってね!

松岡 杏奈(東京都)

曾孫との写真を孫が撮りました! いつも祖母を見るとクスクスとニコニコ笑います。ご機嫌です。祖母は、「いにちゃん、大きくなあれ!」といっぱいの愛情で接してくれます。赤ちゃんにもしっかり祖母の愛情が伝わるんだなとホックリしました!愛情いっぱい。大きくクスクス育ってね!





優秀賞

あれ、パパかな!?

西田 奈緒美(愛媛県)

公園に遊びに行った時に見つけたゴリラ。思わず、「パパが居る」と言っていました。



優秀賞

息子が重い~

門林 泰志郎(福島県)

今日は運動会、息子の成長を感じる母親です。



優秀賞

幸せのまんなかの涙

天野 真里(静岡県)

子育ては順風満帆にはいくわけもなくたくさん笑って泣いて汗してしょぼくれて...どうにかこうにか1歳の誕生日を祝えた歓喜の涙!

入選



棚田で一休み、岩井さんご夫婦

原田 洋子(愛知県)

棚田を守ると高齢な岩井さんご夫婦の稲刈り。作業の合間の休憩に撮らせていただきました。

それぞれの笑顔

宮谷 伸司(愛媛県)

7歳、5歳、4歳、2歳の孫娘たち。
自宅前の公園のフェンスに上る姿勢や表情、笑顔は大事な宝物です。



入選



ファッションショー

岸田 宜征(愛媛県)

大好きなおじいちゃんのズボンを
嬉しそうに履いています。

出来てうれしい走り縄跳び

原田 廉士(神奈川県)

練習の末、走り縄跳びができるよう
になり笑顔全開



だいこんとつたど〜〜!

天野 雅郎(愛知県)

おじいちゃんの畑で大きな大根を
自分で抜いたよ。
ママへのプレゼントでしゅ!



知事賞

団子親子

杉山 湊音(愛知県)

いとことそのお父さんを撮りました。いとこ達は、よくおもちゃの取り合いでケンカをしています。しかし、お父さんやお母さんの取り合いの時は、私では手に負えません。2人とも、引っ付いて離れないのです。なぜなら、両親のことが大好きで、そんな人が世界でたった1人しかいないからです。



特別賞

いつまでも、このままで

中野 龍(愛知県)

友達の祖父母を撮らせてもらいました。初めは緊張している様子でしたが、しりとりをやったりして自然な笑顔が出た瞬間を撮影しました。



河原学園賞

笑顔満開

佐々木 結衣(東京都)

ピカピカ一年生の妹です。満面の笑みを撮りました。

一般の部



愛媛広告協会賞

ひ孫とおばあちゃん 神戸 晴香(愛知県)

近所に住んでいるのでしょっちゅう遊んでもらって、おばあちゃんが大好きな息子です



愛媛県商工会議所連合会賞

孫と初めての散策 原田 史生(愛知県)

久々に帰省した孫と大切な時間を楽しむ2人

小・中・高校生の部 (小学生未満含む)

愛媛県IT推進協会賞

母の笑み 神樂所 真琴(大阪府)

優しい母の笑みに安心します。



愛媛経済同友会賞

暖かい愛顔 今泉 日和(愛知県)

寒い日に行った撮影でしたがそんな寒さなど忘れさせてくれるような暖かい愛顔を撮ることが出来ました。



各賞



愛媛県歯科医師会賞

ゆらりゆらり

秋山 楓(大阪府)

腕を動かして浮遊感を出してみました。

小・中・高校生の部

(小学生未満含む)



愛媛県獣医師会賞

いつまでもその笑顔で

石井 彩乃(神奈川県)

まだ成長途中の妹の、いましか見れない笑顔の瞬間を撮りました。



愛媛県理容生活衛生同業組合賞

跳ねる

吉田 聖(北海道)

友人と海に行った際の一枚です。
写真を撮って欲しいとお願いされ、
思い出の一枚となるようにシャッターを切りました。

愛媛県情報サービス産業協議会賞

「つりかん」大好き

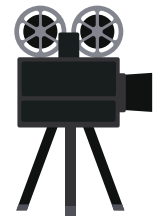
杉野 凜(愛媛県)

妹は、「つりかん」が大好きで、手に豆ができて
鉛筆が持てなくなっても、いつも「つりかん」しています。





愛顔 感動ものがたり



—愛顔感動ものがたり映像化コンテスト—

愛媛国際映画祭では、愛顔感動ものがたり 感動のエピソードを原作とする、「愛顔感動ものがたり映像化コンテスト」を開催しています。令和4年度を受賞作品が決定しましたので、ご紹介します。

受賞作品一覧



準グランプリ 皆尾 裕

原作：『笑顔のために』（川越 乙嬉）

グランプリ

箕面自由学園高等学校放送部 原作：『かぐや姫』（高島 緑）

この度は大変名誉のある賞をいただき、誠に感謝いたします。
原作「かぐや姫」を読んで私は「思い出」に心を馳せ、きらきらした思い出の上で、一人の少女が成長する物語を作りました。
少女の記憶の中の青春を描いた物語で、見ている人にどうすればそれが伝わるのかを考え、台本を何度も推敲し、またカメラカットにもこだわりました。
この作品を見て、自分が通ってきた道にある、宝石のような記憶たちについて思い返してもらえると嬉しいです。



優秀賞 愛媛中央産業技術専門学校 チーム ZOE

原作：『かぐや姫』（高島 緑）



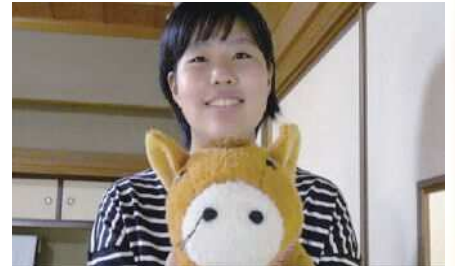
入賞 伊藤 ゆかり

原作：『愛のカタチ』（池田 恋）



入賞 ドネイチャー

原作：『祖母のりょうり』（伊藤 ジョシュア）



入賞 松山南高等学校放送部

原作：『二度目の出番』（渡辺 廣之）



審査委員特別賞 松山北高等学校1年9組

原作：『笑顔のために』（川越 乙嬉）



審査委員特別賞 山口 晃三朗

原作：『笑顔のために』（川越 乙嬉）



審査委員特別賞 今治西高等学校放送部

原作：『笑顔のために』（川越 乙嬉）



審査委員特別賞 近藤 圭

原作：『笑顔のために』（川越 乙嬉）



愛媛国際映画祭公式YouTubeチャンネルで公開中ですので、ぜひご覧ください。

主催 / 愛媛国際映画祭実行委員会



愛媛国際映画祭
公式YouTubeチャンネル





審査委員紹介



イツセー尾形 (審査委員長)

1952年福岡県生まれ。
1982年より現在まで続く「フツの人の日常を描く」一人芝居を開始。
一方で映画にも出演。
2005年「太陽」(アレクサンドル・ソクー

ロフ監督)

2016年「沈黙」(スコセッシ監督)

2021年「ONODA」(アルチュール・アラリ監督)

2022年ハロルド・ピクター作「管理人」(演出 小川絵梨子)

オペラ「こうもり」小澤征爾音楽塾プロジェクト

TVでは「未解決事件警察庁長官狙撃事件」「スカレット」「ワタシたちはガイジンじゃない!」「青天を衝け」「どうする家康」など多数。

2021年刊行「シェイクスピア・カバーズ」の執筆等幅広く活動中。

一貫して人間賛歌を表現し続けている。



神野 紗希 (審査委員)

1983年愛媛県松山市生まれ。
俳人。立教大学・聖心女子大学講師。
松山東高等学校在学中、俳句甲子園をきっかけに俳句をはじめ。歴代最年少で桂信子賞を受賞するなど、若手俳人のリーダー的存在として活躍。「HAIKU LABO」を立ち上げ、愛媛の観光やものづくりを俳句で発信する。
2019年、「日めくり子規・漱石 俳句でめぐる365日」で第34回愛媛出版文化賞大賞。著書にエッセイ集『もう泣かない電気毛布は裏切らない』など。2020年、最新句集『すみれそよぐ』刊行。



中村 時広 (審査委員)

1960年愛媛県松山市生まれ。
1982年三菱商事株式会社入社。
1987年愛媛県議会議員。
1993年衆議院議員。
1999年愛媛県松山市長。連続3期当選。
2010年愛媛県知事。2022年4選、現在4期目。

写真部門審査協力

愛媛県美術会理事	日野 義治
同 常任評議員	大内 清俊
同 常任評議員	楠本 真人



表彰式イベントゲスト朗読者紹介



紺野 美沙子

1980年、慶応義塾大学在学中にNHK連続テレビ小説「虹を織る」のヒロイン役でデビュー。

1987年、日本アカデミー賞優秀助演女優賞を受賞。

1998年、国連開発計画親善大使の任命を受け、国際協力の分野でも活動中。2010年秋から「紺野美沙子の朗読座」を主宰。音楽や影絵や映像など、様々なジャンルのアートと朗読を組み合わせたパフォーマンスを全国各地で公演している。
元祖スー女としても知られ横綱審議委員である。



水樹 奈々

愛媛県新居浜市生まれ。

声優・歌手

『NARUTOーナルトー』、『ハートキャッチプリキュア!』、『ONE PIECE』など多数のアニメーション作品に出演。

外画の吹き替えやナレーション、ラジオパーソナリティ、ミュージカルの主演等と多岐に渡り活躍。

アーティストとしても声優史上初のオリコン首位を獲得、NHK紅白歌合戦に6年連続で出場、東京ドームや阪神甲子園球場などスタジアムクラスの公演も成功させる。

第64回芸術選奨文部科学大臣新人賞大衆芸能部門受賞。

表彰式イベントの様子は

YouTube

でアーカイブ配信します。



エピソードと写真が織りなす感動のイベントをぜひ、ご家族でお楽しみください。

子どもたちの未来のために、 伝えたい想いがあります。

JAバンクえひめでは、食と農業に対する学習や農業体験などを
はじめとした様々なCSR活動を通じて、
自然と調和・共生できる
循環型社会の実現をめざし、地域の皆様の
豊かな未来の実現に取り組んでいます。

JAバンクえひめキャラクター
ぱんじゃくん



JAバンクえひめ

JA うま

JA えひめ未来

JA 周桑

JA おちいまばり

JA 今治立花

JA 松山市

JA えひめ中央

JA 愛媛たいき

JA にしうわ

JA ひがしうわ

JA えひめ南

JA 愛媛県信連



JAバンク えひめ
(愛媛県内JA / 県信連)

「JAバンクえひめ」は、愛媛県内11JAと愛媛県信連の総称です。

JAバンクえひめ

検索

愛^え顔^{がお}感動ものがたり
「感動のエピソード」
& 「愛顔の写真」

令和五年二月発行

発行 愛媛県

観光スポーツ文化部文化局

文化振興課

〒七九〇一八五七〇

愛媛県松山市一番町四丁目四一

TEL (〇八九) 九四七一五五八一

印刷 株式会社 美統

■令和3年度 一般の部 知事賞
「笑顔マーク」中村 真李絵



■令和3年度 高校生以下の部 知事賞
「愛のカタチ」池田 恋



「エピソード」部門の知事賞（平成28年度までは知事賞・特別賞）受賞作品については、水樹奈々さんの朗読に合わせたオリジナル動画作品をインターネットで配信しています。

愛顔感動ものがたり

検索

